

(様式4)

学位論文の内容の要旨

氏名 相田 華絵 印

(学位論文のタイトル)

外国人技能実習生の健康: 来日から1年間の質的縦断的研究

(学位論文の要旨)

技能実習制度は1993年に創設され、技能実習生(以下、実習生とする)は農業、製造業、建設業、介護等86職種、最長5年間実習先企業で技能を学ぶ。日本で働く外国人労働者は増加し、2021年には約172万人であったが、そのうち「技能実習」は在留資格の第3位で20.4%を占める。

実習生は日本での生活により疾病の早期発見と加療等の健康に良い影響がある一方、結核や労働災害の増加、気候風土に起因する健康上の問題が指摘されている。労働災害の約5割が実習開始から1年未満に発生し、日本語レベルが低いことによる来日初期のメンタルヘルス悪化のリスクが高いなど、多くの不調が来日の初期に経験される。この期間の実習業務や生活状況とその変化を踏まえた支援が重要であるが、先行研究に縦断的研究は見当たらない。

そこで本研究は、来日後およそ1年間の実習生の健康状態と関連する要素の経時的変化を質的に分析し、実習生が健康に過ごすために必要な支援を検討することを目的とした。

来日後4ヶ月以内の実習生16人を対象に、身体計測、Kessler Psychological Distress Scale (K6)を用いたメンタルヘルスの状況の測定、傷病の経験、自覚症状、主観的健康感、技能実習や生活に関する半構造化面接及び写真を用いた食事内容の調査を3ヶ月に一度、合計4回行った。入手可能な場合は健康診断結果を確認した。データ分析の枠組みとして、国際生活機能分類(ICF)の構成要素間の相互作用で示される「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」、「健康状態」、「環境因子」、「個人因子」の6要素を用いた。「健康状態」には、身体計測の結果、メンタルヘルスの状況、半構造化面接より得られた傷病、自覚症状、主観的健康感、健診結果の量的データを分類した。質的データは、フレームワーク法を質的縦断的研究に用いたLewisの分析法を用い、ICFの要素に分類した。具体的には、半構造化面接時に作成したメモから逐語録を作成し、逐語録から健康に関連する記述を抽出し、対象者毎に記述内容をICFの「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」、「環境因子」、「個人因子」をテーマとするフレームワークに演繹的に分類した。「健康状態」もテーマに加え、各対象者の各調査回の結果を要約した。次に、各対象者の調査期間中の各テーマの経過の要約及びテーマ全体の経過を要約した。そして「健康状態」を除く各テーマについて、対象者全体の各テーマの特徴をコードとして抽出、コードをまとめサブカテゴリとし、健康に関連し肯定的側面または否定的側面に分類した。そして、サブカテゴリを統合しカテゴリとし、健康に関連する要素として帰納的に抽出した。

その結果、実習生が経験した傷病、自覚症状及び健康に関連する要素の種類や時期は対象者により異なっていた。K6の結果、うつ・不安がある可能性は、各調査回の25.0%以上の対象者であった。各調査回の56.3%以上に実習業務、日本語によるコミュニケーション、居住環境等のストレスや困っている事等があり、そのうち44.4%以上にうつ・不安の可能性があった。介護や製造業等重労働を伴う対象者は、来日初期の調査前半に筋骨格系の不

調があった。調査期間中、5人(31.3%)が医療機関を受診した。そのうち4人は付き添いを伴わず本人のみが受診しており、全員が看護大学を卒業した介護職種であった。健診結果は日本語で通知され、6人(37.5%)は、内容の理解が不十分であった。

健康に関連する要素として、《睡眠の状況》、《自立の喜びと抱える不安》、《活力の低下と疲労感》、《実習業務の遂行》、《コミュニケーション能力と日本語学習の取り組み》、《健康管理への取り組み》、《日本の生活への適応》、《余暇活動と日本人との交流》、《宗教活動》、《技能実習環境》、《住環境》、《友人・家族・職場等からの支援》、《自然環境・経済動向》、《節約志向の生活》、《来日の動機と1年後の自己評価》の15カテゴリが抽出された。

1年間の健康の推移について、メンタルヘルスの状況は、うつ・不安の可能性があった時期により、①調査期間全体(4人、25.0%)、②調査前半(3人、18.7%)、③調査後半(3人、18.7%)、④なし(8人、50.0%)に分類され、①～③の事例では、経済状況への不安や職場への不満、コミュニケーションの困難さ、同居者との不仲や母国の家族と離れた暮らしの困難さ等の健康に関連する要素の否定的側面が、うつ・不安の可能性があった時期に経験されていた。

以上、実習生は来日後約1年間でストレス、筋骨格系の不調、うつ・不安がある可能性等、様々な身体的及び精神的症状を呈していた。実習生が健康に過ごすためには、健康に関連する要素の変化に合わせ、ストレスに関連する否定的側面を早期に取り除き、肯定的側面を維持・促進することが重要である。また、実習生のヘルスリテラシーは来日前の経験や実習職種、日本語能力により異なることから、ヘルスリテラシーを高めるための継続的な日本語学習支援、運動施設・医療機関に関する情報提供、多言語に対応した健診実施体制の整備、実習生を取り巻く関係組織との連携や利用頻度の高いコミュニケーション手段の利用等による情報提供方法の改善が有用と考えられる。